

研究課題

「偏位を伴う骨格性下顎前突症例における

顎矯正手術前後の正貌軟組織の特徴把握」

1. 研究の目的

偏位（アゴのズレ）を伴う骨格性下顎前突症（下アゴが前に出ている状態）における顎矯正手術後の形態変化について、過去にもいくつか報告がありますが、画一的で平均化されたデータですべての患者様の術後予測することには限界があります。そこで、形態変化に個人差のイメージも盛り込むことで、よりの確な術後予測が可能になり、患者様ひとりひとりに適した治療計画立案、および情報提供をすることができます。また、これまでに偏位を伴う骨格性下顎前突症に関して、いくつかのバリエーションが存在することが知られていますが、正貌軟組織（前から見た顔）についての報告はみられません。本研究では、偏位を伴う骨格性下顎前突症例の初診時、術前時、および術後時の正貌規格写真を用いて、顔面の各項目について計測を行い、クラスター分析によって術前正貌をグループ化し、**各群の術前後の形態変化を分析**することで、顎矯正手術後の形態変化様相を明らかにします。

2. 研究対象および方法

1980 年から現在まで新潟大学医歯学総合病院矯正歯科において、偏位を伴う骨格性下顎前突症と診断された患者様で、先天異常のない方が対象です。

本調査では、診療録に記載されている情報や検査の際に撮影した正面規格写真（正面から撮影した写真）を使用します。利用に際しては、資料から患者様が特定できないように管理し、かつ資料を用いて分析・評価した結果は、学会発表、学術雑誌等で公表することはありますが、その場合にも患者様の個人情報は一切明らかになることはありません。なお、結果は個人の数値ではなく対象者全体から得られた平均値などを用いるので個人としてのデータが公表されることはありません。

3. 臨床的意義

偏位を伴う骨格性下顎前突症における顎矯正手術後の正貌軟組織の形態変化について、これまでも多くの議論がなされてきたものの、未だ明確なコンセンサスが得られていません。本研究によって、症例をクラスター分析し、グループごとの形態的特徴を把握することで、患者の個人差を考慮した術後予測が可能となり、患者様への情報提供がさらに正確なものになると考えております。

本研究にご協力いただけない場合には下記連絡先にその旨をお知らせ下さい。分析の対象者から外させていただきます。なお、本研究にご協力いただけない場合でも、今後の診療などで何ら不利益を被ることはありません。下記連絡先にお知らせください。

その他、本研究についてのご質問や疑問点などがございましたら、いつでもお気軽に下記宛にご相談ください。

新潟大学医歯学総合病院矯正歯科

TEL : 025-227-2960 (外来診療室)

診療科長：齋藤 功

主任研究者：新島 綾子

E-mail:nijijima@dent.niigata-u.ac.jp